

1

(1 順不同・完答 2・7 各完答)

1 ア・エ
2 A イ
B エ
C ア

3 どちらの考えに賛成する

4 I 同じよ
II 強
5 掟
6 共存

7 住む くなる
8 ウ

9 とになる。
10 イ

11 a 必要
b 満足
c 底

2

(3 (1) 順不同・完答 4・9 各完答)

1 a 追試
b 中庭
c 差別

d 幸
い

2 B
3 (1) ア・ウ
(2) エ

4 A ア
B エ
C ウ
5 (記述題)

6 I メニ
II お菓
7 づち
8 イ

9 (1) ダ
ヴ
イ
デ
(2) 美人
(だ)

2

5
自分が好意を持っていて
る。ダ
ヴ
イ
デ
のことが、気を母
が悪く言うの、気が
くわなかつたから。

(同意可)

配点	
1	11
2	5
その他	
各2点×7=14点	
6点	
各4点×20=80点	
100点	

1 順に丁寧に流れをつかんでいこう。アは「この歌詞のとおり、くが大切」というつながりである。本文一行目の歌詞を読むと「ナンバーワンになるヒツヨウはない」とあるので、ここで大切だと言っているのは「オンリーワン」である。イは「競争社会」で価値があるとされているものは何か、と考える。ウとエは前の段落の内容を受けて「反対の意見」として述べられている。

2 (A) は前の段落の内容に対して「反対の意見もある」とつないでいるので、「一方」があてはまる。(B) は前後で実験の過程と結果を述べているので「すると」があてはまる。(C) は前で述べたことを後でまとめているので、「つまり」があてはまる。3 まず文末が「くだらうか。」の形になっているので、疑問文であると思当をつけられるだろう。「どちら」ということばがここまでの「ナンバーワン」と「オンリーワン」のことを指すと気付けば、「賛成する」ということばの使い方も見えてくる。「もし」を使おうとすると、「くなら」あるいは「くだら」ということばもなくしては、文がうまくつながらない。

4 それぞれ、() の前後のことばと本文中のことばとの対応に注意して探していこう。――線②の「明確な答え」については直後の段落から説明が始まっている。Iは、自然界ではだれがどのように「激しく競争」するのか、と考えて字数の合うところを探そう。

5 「鉄則」の「則」は、「きまり」を表す字である。字義を知らなくても、すぐ近くに「法則」ということばがあり、「ルール」などといった類義語を思い浮かべながら読んでいけば「厳しい掟」ということばにたどり着けただろう。

6 ここまでのガウゼの実験で、生物はすべて「ナンバーワン」でなければ生き残れないという結果が出たことに対し、ひとつめの④を含む段落の前の段落で疑問が提示されている。ナンバーワンしか生きられない世界で、現実には数多くの生物種が共に生きているのであり、この後の実験結果で「住み分け」によって「共存」が可能になっているということが明らかにされる。

7 「住み分け」ができる理由を問うている。◎の文の() の後のつながりから、「激しく競争しなくてもよい」のはなぜか? と考えていこう。

8 ここまでの話の流れから、「ナンバーワンしか生き残れない」とことと「住み分けによって共存できる」ということが両方説明できる選択肢を選ばばよい。

9 「それなのに」という接続語から始まっているので、◎の文の「さまざまな生き物が暮らしている」という内容に対して、その直前に書かれるはずの内容は「生き物は共存できない」というようなことであると推測できる。ただし、直前だけを見ているとつながりそうな内容でも、◎の文を挿入したことによってさらに後続部分とのつながりがおかしくならないように気をつけなければならぬ。

10 本文全体を通してテーマとなっていたことは何だったか。アやウでは抽象的すぎて、この部分の主題とは言いづらぬ。

11 a 「必要」は「要」の上の部分。「悪」の上の部分のように「垂」にしないこと。b 「満足」は「満」の右下部分を「ム」のような形にしないよう気をつけよう。c 「底」は最後の一面を書き忘れたり、「氏」を三画で続けて書いたりしないように気をつけよう。

2

1 a 「追試」とは「追試験」の略で、学校などの定期試験を受けられなかった者や不合格となった者に対して特別に実施することである。b 「中庭」の「庭」の右下部分を「延」と混同している間違ひを見かける。しっかりと区別しよう。c 「差別」は「差」の四画目の縦棒を七画目と続けて書かないように気をつけよう。d 「辛」は「幸」と字形が似ていることから混同している間違ひが多い。また、意味の面で「災い」と混同している間違ひも見かける。しっかりと区別して覚えておこう。

2 Bは、母のひと言で「ダヴィデにも好かれぬかも知れない」というような不安な気持ちになっていることが見て取れる。他はすべて、母に心中を見透かされたような気がして驚いている様子である。

3 まず、霧子はおおまかに言って「ダヴィデに対してはプラス、アンドレアに対してはマイナスのイメージを持っている」と考えよう。よいだろう。Aについては、――線②の直後にはつきりと書かれている。Uについては――線⑤の直後で「ダヴィデと、高貴なイメージのグレーハウンドはく似合っている」と考えているところからわかる。イヤオはマイナスのニュアンスでは使われないことばなので、アンドレアに対するイメージとしては合わない。エの「冷淡」は、「そっけなくて思いやりがないこと」という意味である。

4 「ピラヒラ」は、薄くて軽いものが揺れる様子を表すのでワンピースの話をしている(A)にあてはまる。「のびのび」は、押さえつけるものがなく自由な様子を表すので、もう一匹の立派な犬が居なくなつて窮屈さを感じなくなった、という流れの(B)にあてはまる。「きよろきよろ」は、あたりを見渡す様子を表すので、(C)にあてはまる。

5 「ふてくされる」は、「不満があつて投げやりな態度や反抗的な態度をとること」である。そのような態度をとる原因となる心情とともに、ここではどんな不満があるのか、ということも踏まえて書いてほしい。

6 【中略】の前の場面は霧子と母が話している場面である。バジリコ兄弟に話題が移っていくが、本来の話題は「カフェのメニューを決めること」であった。――線③で外出しているが、この前後からは外出の直接の目的はわからない。――線③の後を読み進めながら、どこへ向かっているのか? と疑問に思っていれば――線⑤の三行後で本来の目的を思い出した霧子が気持ちを切り替えようとしていることにも注目できたはずである。

7 日常よく目にする慣用語だろう。鍛冶などで交互に槌を打つ様子からきている。元が「槌」なので、「ざち」としないように。

8 線⑤の直前で「自分も雑種だ」と、雑種犬のピッポにイタリア人と日本人のハーフである自分を重ね合わせていることが読み取れる。ダヴィデには「高貴なイメージ」がびつたりで、「雑種のピッポと歩いている姿なんて、想像すらできない」とある。「雑種のピッポ」と霧子自身を重ね合わせていることは、その後で「わたしは犬じゃないって」と気分を変えようとしているところからもわかる。

9 線⑤で自分はダヴィデと釣り合わないのでは、という不安を感じた四行後に「それに、美人だと言ってくれたし」と不安を打ち消そうとしていることからわかる。ダヴィデに好意を持つようになったのも、そういうやりとりがあったことが一因だろうと考えられる。